

## 平成 28 年度教員採用候補者選考試験を顧みて

教職支援センター

教育学科特任教授 岸 本 芳 信

各地で本年度実施された教員採用候補者選考試験では、本学学生は全学的に好成績を挙げて終了した。小学校現役では近年にない成績を残しており、中学校・高等学校・栄養教諭現役もよく検討している。

本稿では、今後の採用試験に向けての参考となればと考え、合格者数の変遷、全国的な状況、今後の採用状況等についての報告と考察を行う。また、今後の教員採用試験に繋がる諸事情についても、若干考えてみたい。

### (1) 平成 28 年度教員採用候補者選考試験の結果

#### ① 本学の現役生の状況

まず、本学の現役学生の平成 28 年度採用試験の合格状況を見てみたい（人数はすべて延数）。

小学校教員受験者の合格者は、一次 99 名、二次 57 名である。近年の状況から見て、大成功であったと考える。中・高等学校では、一次 16 名、二次 9 名である。栄養教諭は、一次 9 名、二次 4 名である。いずれの校種も上昇気流である。しかし、5 年ほど前までは過年度も多かったが最近は過年度の報告が減少している。合格者が減ったのか、単に報告がないのかは不明である。過年度卒業生の受験状況をどう把握するかが課題である。

合格者の多い小学校の最近の合格者数の推移をみると、図のような状況である。小学校の現役の一次から二次への合格率（二次試験辞退者は不合格扱いとしている）は、異常に高い（原因不明）平成 26 年度の 70% は別にして、平成 22 年度までは 60% 弱で、それ以降は 50% 弱である。この値は全国と比べて高いと自負している。受験前の学生の熱心な練習風景が思い出される。

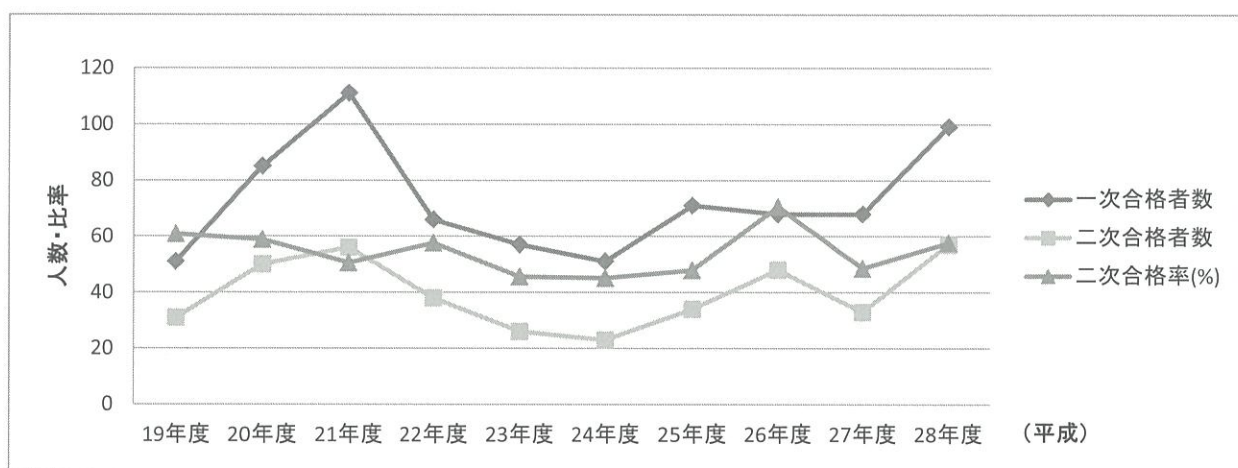


図 小学校教員採用候補者選考試験の 10 年間の合格状況（現役学生）

さて、本年度の本学生の合格者増加の原因を考えると、次のような状況が考えられる。

ア 学生の努力：熱心な取り組み、講座受講、ワークショップへの参加等

イ 予備校等による講座の充実：1 回生講座、入門講座（2 回生用）、基礎講座（3 回生用）  
ウ 学科のバックアップ：各学科での免許取得者の激励会等、教育学科のゼミでの対策強化  
エ ライブラリーコモンズ：数学・理科・国語の基礎学習と相談（遠慮がちな学生にとっても、訪問しやすい場所となっているようである）

オ 関東合宿：本年度に限ったことではないが、関東地区受験者の増加と意欲の向上

カ 全国的な教員採用試験倍率の低下：企業就職状況の好転も反映したか

一方で、全国の合格倍率の変化（「教員養成セミナー」時事通信社 2016.1 月号 34、35 頁）と比べると、本学の小学校の現役合格者数は、率の大小は別にして、全国の倍率の変動につられて動いている傾向もある。

## ② 全国状況

上述の「教員養成セミナー」時事通信社等の教員採用情報を基に、平成 28 年度教員採用候補者選考試験の全国状況を見ると、概ね次のようなことが言える。

ア 全校種の倍率：平均が 5 倍を切った。

イ 小学校の倍率：ここ 10 年で最低となった。

ウ 中・高等学校の倍率：最近は減少傾向にあるが、専門教科によって高低がみられる。

エ 栄養教諭の倍率：採用数に変動があり、倍率も自治体ごとの変動が激しい。

オ 自治体毎の倍率：本年度試験では、小学校で 3 倍を切ったところもかなりある。

## (2) 今後の教員採用状況

広島大学大学院の山崎教授（「教職課程」協同出版(株) 2015 年 11 月号 68～85 頁）によると、教員需要数は小学校で平成 29 年春がピーク、平成 32 年に大都市部を中心に急減すると予測されている。少々、その概要を見ると、全国平均で、中学校では平成 32 年春にピーク、その後減少していく。地域ごとには大都市よりも地方でピークは遅い傾向にある。

特に、本学の学生の多い、近畿、中・四国を見てみると、近畿の小学校では平成 28 年春をピークに、平成 33 年春以降の減少が激しい。また、中学校では平成 32 年春にピークを迎え、その後減少に転じている。中国・四国の小学校では平成 33 年・34 年の春をピークにその後減少していく。中学校では平成 32 年・33 年の春がピークとなっている。

今後は、早期からの受験対応が必要になると思うが、大学の教員養成状況の変化、子どもの減少による学校の統廃合、国の教員需給計画にも注視しつつ考えていくことが大切であろう。

## (3) ちょっと気になる、教員採用試験前の教育実習の状況

ここまで採用試験の概要をみてきたが、非常に厳しい状況が待ち構えている中で、本学での教員養成の中核科目である教育実習の状況について考えてみたい。教育実習の在り方や準備については、多くの検討の余地があるが、とりあえず本年度の教育実習の状況を一部について振り返ってみたい。

### ① 教育実習訪問者連絡票から（教職支援センター事務室のまとめから特徴ある語句を拾ってみた）

#### 委託先学校からの要望・称賛

○優秀な学生なので是非教師を ○教職を目指す意識が高い ○卒業生の教員が良く活躍 ○前任校でも神卒卒業生は秀逸だった ・社会科は「公民」の資格も ・教育への熱意が必要 ・大学で



もっと指導案を書く練習を、又、指導案の中に「評価の観点」を ・向いていない学生は実習を中止に ・栄養の実習期間が短すぎ ・児童の名簿欄は個人情報保護の観点から削除を

#### 実習校訪問教員の意見等

○高校の真摯な対応、懇切丁寧な指導 ○他教諭及び生徒達とも良好な信頼関係を築いて ○準備が良好 ○真面目かつ積極的 ○想定外の質問にも上手に対応 ○意欲的で先生方からの評価も高い ○子どもとの信頼関係が築かれて ○板書計画、教材の準備は充分 ・電子黒板の活用力が弱い ・授業全体に力強さがほしい、言葉遣いに“幼さ”が ・研究授業でない、生徒も騒ぎ過ぎ ・関心熱意が見られず、積極的に保育に関わる態度がない ・礼儀正しく一生懸命だが授業力が不足、実習記録が不備で改善されない ・教材研究が不十分で、内容が浅い ・積極的な子どもとの関わりを ・行事を控えており、授業指導が弱い

#### 今後の課題・その他（訪問者の感想等から）

・授業の内容が生徒に十分伝わっていない。学力の向上と自信ある授業のできる心構えの養成が必要 ・靴底の音がやや耳障り、事前指導での徹底が必要 ・内容の選択・整理の力量と知識が必要 ・大学での授業で基礎的な知識を持たせる重要性を ・前もって訓練が必要、少なくとも“話し方”の訓練を ・本学での教育の不足が気に ・教員の「仕事」や「姿勢」を学ぶ機会として生かしていないという印象 ・4年間何を学んできたのか、幼児が見えていない ・専門領域を超えて基礎的知識や教育に対する見識の涵養が必要 ・授業の停滞が気になった ・実習指導の在り方、実習記録ノートの内容等について、コース会議で提案したい

#### ② 実習校からの評価票から（教職支援センター事務室のまとめから特徴ある語句を拾ってみた）

多くは、おおむね良好な評価やご意見をいただいているが、ここでは気になる表記を短く加工して羅列してみたい。

・人の話を聴く姿勢を ・教材をよく理解できていない、発問や説明に言葉が不足 ・全体として真面目、指示待ち、前向きな行動を ・当初はボンヤリ、受け身な態度 ・自ら生徒に話しかけて意思疎通を図る姿が不足、教師になりたいという強い意志は感じた、今後に期待 ・教材研究に努力を、教科書の内容についての理解不足 ・一度作成した指導案を何度もコピーして使用。ノート記入が遅く何度も注意を、また最終提出も約束の期日より大幅な遅れ、出席表の押印も怠り、まとめて押印した結果、欠席日にも押印。生徒との関わりも積極性がない。 ・学級経営や生徒指導などを通して、コミュニケーション能力や言葉遣いを身につけて ・真面目な態度で実習に取り組んだ。幼児とのかかわり方は、やや消極的。ピアノ伴奏、記録、幼児に接する態度、言葉遣い等今後の努力に期待。 ・「教育実習」への意欲が乏しい。指示には素直な態度で応じた。指導計画や反省に関しては、具体的な助言が活かしきれず、研究保育も実践できなかった。 ・子どもとの話は良好だったが、反面、子どもを指導する立場を忘れ、責任感の欠如を感じるが多々あった。人と関わる上で大切な信頼関係を築くことが難しい、今後責任を持って行動できるように。 ・記録をつける、訂正や修正をする、期限を守る等、社会人として課題があり、改善されなかった。社会人としての振る舞いや教育者としてあるべき姿を今一度考えてほしい。 ・努力や熱意を感じたが、子ども達に何を指導するのかを十分に理解し指導にあたるということが課題。言語力や表現力、指導力を増し、課題を克服されるよう願

う。 ・自己主張が強い分、人間関係において苦勞をする可能性が大、周りの雰囲気をよく見て適切な行動や言葉をとる力を養うことが必要。

#### (4) まとめにかえて

まとめとして、教員採用試験の在り方や今後の教員の姿を、気の向くままに並べてみたい。紙面の都合もあり、詳細な検討は今後の課題としたい。

##### ① 大学入学試験の状況から

大学入試の科目数の減少の影響：大学受験対策上、全科目対応の学びではなく受験科目対応の学びになっている学生が多いのではと感じる。したがって、教科の学びに偏りを感じる。特に、小学校教員を目指す人は、幅広い面からの学びを大切にしてほしい。また、文系学生の増加で、理数系に弱い教員志望者が増加しているように感じる。

##### ② 各自治体の教員採用試験の方向から

自治体の採用試験の在り方で、受験科目の減少、大学推薦や教師塾等を加えた一次免除の増加がある。適切な教養学力、教育時事についての知識等を評価するシステムが失われないように希望する。採用試験対応の予備校等も増加しており、受験能力に偏った方法への対応を意識した採用方法も考慮されるべき時が来るのではと考える。また、保護者対応・子ども対応等の力量アップが需要視されているが、今後は知識・教養と人物のバランスが必要になってくると考える。さらには、採用試験の倍率低下による新規採用教員の力不足は否めないでしょう。ならば、採用後の研修の在り方について、現在以上に、組織的に対応するよう検討していくことも大切であろう。

また、インターン制の採用、臨時講師の採用方法を一次試験の結果を参考にした登録制にするなど、教員予備軍の内容ある活用も考えてみる必要があるだろう。

##### ③ 小学校教員の全教科担当制について

現状をみると、小学校教員の負担増が大変である。英語教育、道徳教育、発達支援教育、情報教育、部活動指導、いじめやしつけ対応等々、課題が目白押しである。このうえに、さらに教科指導の多様性も目に見えている。いま検討されている免許法の改正に期待を寄せるわけであるが、この際、思い切って小学校教員の2人での学級担任制や教育課題への専門対応職員の採用も考えてみてはと思う。現状の子ども・家庭対応、その他の教育要請に対応するためには、教員のゆとりが必要に思えてならない。そうすることで、教員の担当教科の分担も進み、教科指導の充実も図ることができる。また、たとえ全教科担当が続いても、教員それぞれが、今後は、自信を持って対応できる得意分野を作ることが大切である。大学時代から幅広い人間を目指し、併せて、得意分野を開拓してほしい。(本稿は2016.2.4の本学での教職研修会の内容を基に加筆考察した。)



## 強い志を持ち たゆまぬ努力を ～夢を実現させるために～

教職支援センター

榎 元 十三男

### はじめに

忘れたくない言葉がある。

- ・「子どもを笑う教師ではなく、子どもと笑う教師であれ。」
- ・「『先生と遊ぼう！』と言うよりも、『先生遊んで！！』と言ってもらえる教師になれ。」
- ・「若いうちは失うものは何もない。汗かけ、恥かけ、指導案を書け！そして未来を描け！！」
- ・「教えたことをそのまま教えるのではなく、教えたことを子どもが学びたいことに変えていくのが教師の役割だ。それが教材研究である。教えるに値する学びを確立せよ。」
- ・「与えられた学力は時とともに剥落してしまうが、自ら獲得した学力は限りなく広がり、生涯の自分を形づくる礎となる。子どもが自ら発見・活躍できる日々の授業を創れ。」
- ・「悪いことをしても、その行為は悪いことかもしれないが、決して悪い子ではない。」
- ・「しつけとは、教師や親自身がしつづけること、決しておしつけにならないこと。」
- ・「学校は子どもの命を預かり、命を守り、命を育てていくところである。我々が生きている一日は、きっと今は亡くなった誰かが生きようとしていた一日なのだ。だから、その一日一日を精一杯生きねばならないことを子どもたちにも伝えていこう。」
- ・「我々は子どもを育てているのではなく、10年後、20年後の大人を育てているのだ。」
- ・「一人で歩くのもよし、二人で歩くのは尚よし、みんなで歩くのは更によし。」

これらは、学校現場で授業がうまくいかず、学級経営も子どもとの呼吸が合わず、苦悩の日々を送りながら目標を失いかけていたころ、先輩教師や教師仲間から語りかけられたものである。何気ない会話や校内での研修中のほんの一部であるが、書き留めておいたメモ帳をひも解いてみると、子どもを理解することの意味、子どもに向かう教師の立ち位置や目線、子どもを主体とした授業の在り方、教師としての心構え等、その本質が見えてくるような気がする。おそらく、長い学校文化の中で先輩教師もそのまた先輩たちから受け継いできた指針となる言葉であろうが、今の学校現場に山積する様々な課題もそしてその答えもこれらの言葉の中に隠されているような気がしてならない。

多くの学校では、互いの資質向上や授業力アップを図る方法の一つとして、「OJT (On the Job Training)」を取り入れ、「職場の中で日常的な職務を遂行しながら、仕事に必要な知識や技能、意欲、態度などを、意識的、計画的、継続的に高めていく人材育成の取り組み」を営々として進めてきている。大量退職、大量採用の時代に入り、とりわけ若手教師を対象としたプロフェッショナルな“本物の教師”を共に育てることを目指し、一人で思い悩み孤立した教師を作らないために学校を挙げて取り組んでいる。「教師力」の一定の水準を保つことは、保護者や国民の信託に応えるという学校に課された役割を果たすことにつながるからである。

## 教師という職業

学校は、子ども達に確かな学力と学習意欲を身に付け、将来を自分の力で「生き抜く力」を養うところである。合わせて、学習指導要領や教育基本法が示すように、「公民的な資質の基礎を養う」ために、学力とともに「豊かな心」、「たくましい体」をバランスよく育くみ、いつの時代においても変わらぬ教育の根本理念である「人格の完成」に繋げていくところである。

一方で、学校教育はその時々の変化や新たな課題に沿った要請や改革が行われ続け、時代とともに刻々と移り変わり留まるところを知らない。それは学校教育への期待の裏返しでもあり、日々社会の進展に連動して改善を進めなければ相対的に後退することになってしまい、現状維持では高い評価が得られない状況になってきているからである。

そこで、多くの教師たちはこの不易と流行の狭間で喘ぎながらも、大きなうねりを学校全体として受け止め注視しつつ、最終的には目の前の子どもたち一人ひとりに全身全霊で使命感を持って立ち向かい、何はにおいても日々の授業を中核に据えて、最善の努力を重ねているのである。

しかしながら、現実的には学校での教師たちの日々の授業は、どんなに時間をかけて準備しても、上手くいくことよりも思い通りにいかないことの方が圧倒的に多く悪戦苦闘の連続である。とりわけ小・中学校では、個々に興味関心も学力の程度も違う子ども達に、その学年で習得させなければならない一つひとつの事象や事実をその子なりに実感させ、納得させ、理解させなければならない。至難の業である。授業ほど奥深いものはない。これでいいという限りがない。上手くいったと思っても自己満足に過ぎないことが多い。結果的にはどんな授業をしたかよりも、その授業をしたことによって子どもにどれだけ力がついたかが常に問われ続けている。

加えて、教師にとっては授業以外の種々雑多な分担事務も相当に重くのしかかり、子どもと向き合う時間を十分に確保することができないことも全国的な課題となってきている。喫緊の課題として校長会・現場教師・教育委員会等が連携してその多忙化解消に取り組んできているが、一人で二役も三役も担っている教師達が当たり前存在する学校も少なくない。

また、常に寄り添っていれば子どもは決して裏切らないと言われるが、「喧嘩」「からかい」「意地悪」「暴言」「いじめ」「不登校」「対教師暴力」など、どんなに丁寧に対応してもその仕方によっては裏切られることもある。寄り添って何をどうするかで異なってくるのである。

さらには、保護者との信頼関係も一步間違えると大きな誤解や不信感を招き、延々と泥沼にのめり込んでいき、あっという間に崩れることもある。挙句の果てには「説明せよ」「謝罪せよ」「保証せよ」と詰め寄られ、昼夜の境なく関わらなければならないこともある。これは、どこの学校においても起こりうる可能性のある現実でもある。

教職は、苦労や努力や労力に比べ、まったく割に合わないと言ってもおかしくない職業といえる。それでも、教師はどこにやりがいや喜びを感じているのだろうか。



## なぜ教師を目指すのか

前述のように、学校現場には常に喫緊の課題や様々な困難が山積している。それなのに、多くの教師達が子どもの前で自信に満ちた笑顔でいられるのはなぜなのか。

それは端的に言えば、日常の多忙感やうまくいかなかったときの虚無感などをはるかに乗り越えた感動や喜び、そして充実感や達成感や一体感を感じ合える場面が、日頃の苦勞の倍返しで待ち受けているからである。繰り返し粘り強く指導し何度も失敗した挙句の果てに、できなかったことができるようになったときの弾ける笑顔に触れたとき、そして担任としてすれ違いの多かった子ども達との間柄に、互いの心の通い合いを見出せたとき、何物にも代えがたい無上の喜びが一気に溢れ出てくる。それまで思い悩んでいた何もかもが、ほんのちっぽけなことのように入れ、教師としてのやりがいを全身で感じる瞬間でもある。

また、学校は組織である。一人の力は大きい、チームの力はそれよりもはるかに大きいことをどの教師も知っている。子どもを中心に据えた教師間の支え合いの中で醸成された活力は、確実に子どもたちの伸び行く力となって還元されていく。冒頭と同僚性を活かしたOJTの取り組みでも触れた通りである。学校は一人で悩む所ではない。うまくいなくても、それは教師の誰もがくぐってきた道である。そこには「決して孤独な先生をつくらない」という教師のやりがいと誇りを創り出す学校文化が生き続けている。だから教師は笑顔でいられるのである。

ここで、私自身が新任教師で小学2年生の担任であった時のエピソードを紹介したい。

◇2月の寒いころだった。新任の私は何をやってもうまくいかず、当時の校長に「あなたのやっているのは授業とは言えない。私が全教科授業するから見ておきなさい！」と、子ども達の前で叱られ、全教科やっていただいた。それはそれは、子どもの心を惹きつけ、的を射た流れるような授業だった。私は、それを自分の力に変えようという感謝の気持ちよりも自分の力の無さを感じ失意のどん底だった。それでも、終業式までは子ども達への責任を果たし、職を辞すのは4月からと決めた。それからの私は、明日の授業のための資料や問題作りで必死となり、徹夜で続けた。ところが、体にだけは自信のあった私も、ある朝目が覚めると下宿のトイレに横たわっていた。高熱で頭が割れそうで声も出なかった。子ども達との残された日がわずかしがなく、教員は休んではいけないものと思い込んでいた私は、学校に行った。教室に入るなり、私の体調の異変に気付いた子ども達は、寒い日だったのに上着を脱ぎ始め、廊下から一番離れた教室の隅っこにその全員の上着でベッドを作り出した。口々に「先生、ここに寝とき！みんなでかしく自習しとくからな！」という声が聞こえた。さらには、自分達で1時間ごとの見張り番を作り、校長が見回りに来て足音がした時のサインを決め、その時だけ私を起こすことにしてくれた。2年生の子ども達である。◇

今なら教師失格であろう。それでも私は、世界一温かいベッドの上で涙を堪えるのが精一杯だったことを覚えている。そして、「この子ども達のためなら死んでもいい。」と真剣になって書いた日記は一生の宝物である。出会えた子ども達と当時の校長には感謝の念しかない。

## 本気で教師を目指すなら

教育は、国の将来を左右する人材を育てる職業である。社会的責任も重大であるが、揺るぎない強い意志を持った誰かがきちんと受け継いでいかねばならない働きがいのある職業である。みなさんには、喜びも辛さも併せ持つからこそやりがいを見出せる教師という職業を、生涯の天職とすべく、是非とも挑戦していただきたい。プロ教師となるためには、全力で突破し越えなければならない大きな壁があるが、夢と希望を持ち続け、志を高く掲げて挑戦すれば、決して越えられない壁ではない。

以下は、この一年間、教採突破を目指す学生とともに過ごしてきた雑感である。

### ○志望理由の表明がすべての原点

- ・なぜ教師なのか、なぜ子どもが好きか、どこにやりがいを感じるのか、決意と強い意志を伴った考えをいつでも・どこでも・誰にでも言えること。表明することによってなりたい自分に近づける。挑戦の前にまず自分自身を知ること。言えなければ資格なし。

### ○今やる・すぐやる・自分がやる

- ・ライバルは日本中に山ほどいる。のんびりしては直ぐに追い越される。教職には豊かな知識・教養も不可欠。確かな筆記試験対策を。早ければ早いほうがゴールに近い。

### ○あせらず・たゆまず・おこたらず

- ・スタートダッシュで息切れしては力も半減。メリハリをつけた自分のペースやスタイルを確立すること。「過去問1日最低50問」などノルマを決めて着実に積み重ねていく。休まずしつこくやり続けること。付け焼刃は後々の学びに繋がらず役立たずの積み重ね。

### ○人の助けも借りてやる

- ・同じ夢を持つゼミ仲間と切磋琢磨して。難関を突破した先輩の力をバネにして。教職支援センターをフル活用して。各種講座・ワークショップに参加して。自ら求めて流れに乗る。

### ○相手を知り、自分を知る

- ・受験地の教育方針、過去問、傾向等の最新情報を徹底的に収集したうえで、自分の得手不得手を加味した対策を練る。キラリと光る自分の持ち味をさりげなく出す。

### ○最後の最後は自分自身

- ・最後は自分との闘い。本気の自分を創り上げていくのは自分自身。普段の生活の中に教師を目指す自分を組み入れ創り上げていくこと。笑顔、挨拶、時間厳守、整理整頓、身だしなみ、言葉遣い、立ち居振る舞い、思いやり、感謝、おもてなしの心……  
すべて日常生活の中に根付かせて、人としてよりよい自分を意識的に育みたい。
- ・爽やか、淑やか、穏やか、細やか、華やか、和やか、軽やかな人に人は魅力を感じる

## おわりに

教職には、「人を育てる」という確かな目標を持って仕事ができる幸せがある。子どもは親の宝であり、学校の太陽であり、国の未来である。志のある神女の学生が、一人でも多く教育の世界で光り輝きながら、子どもたちと共に活躍できることを心から願う。



## 「英語科指導法Ⅰ～Ⅳ」・「教材研究・教授法」の取り組み

文学部 英語英米文学科

助教 本田 隆 裕

私が学部生時代に履修した指導法に関する授業は、講義のみの授業で、模擬授業のような授業実践のための時間は皆無であった。従って、私は授業の練習を一切せずに教育実習に臨んだことになる。一方で、指導法の授業は模擬授業ばかりだったという人の話も聞いたことがある。模擬授業を経験せずに教育実習に向かえば、どのように授業を展開していけばよいのか分からないだけでなく、実習を通して何を学ぶべきなのかということもほんやりとしてしまう。また、指導法の授業が模擬授業だけで終わってしまえば、外国語教育について深く考える機会は少なくなってしまう。つまり、講義と模擬授業の両方が必要であると考えられる。

そこで、私が担当する英語科指導法Ⅰ～Ⅳでは、どの授業も前半に外国語教育に関する講義を行い、後半に模擬授業を行うというスタイルを取ることにした。また、後半の模擬授業について反省する際には、前半の講義内容に基づいて自分の模擬授業を振り返るよう指導した。各科目の内容は以下の通りである。

英語科指導法Ⅰでは、文法訳読式など伝統的教授法と呼ばれる教授法の反省からコミュニケーション型言語教授法へと教授法が変遷していった背景について講義を行った。指導法Ⅱでは、指導法Ⅰの続きとして、コミュニケーション型言語教授法の問題点を解決する第三のアプローチとして近年注目されるようになったフォーカス・オン・フォームに基づく授業づくりについて講義を行った。従って、この2つの科目で外国語教育におけるこれまでの問題点と今後の方向性について基本的な知識を身につけられるようにしている。

さらに、指導法Ⅲでは、具体的な指導法の例としてインテイク・リーディングと呼ばれる指導法（齋藤（2011））を紹介した。この指導法は、英語のインプット・アウトプットに加えて重要でありながら、あまり指導の現場で意識されていないインテイクをどのように行えばよいのか具体的な方法を示しているだけでなく、積極的に取り組ませるのが難しいペア活動を簡単に行える指導法でもあるという点で優れている。また、指導法Ⅳでは、第二言語習得研究や生成文法などの理論言語学と外国語教育との関係について講義し、言語および外国語教育に関する科学的教養を身につけられるようにした。

先に述べたように、どの科目でも前半に講義、後半に模擬授業というスタイルをとったが、指導法Ⅰのみ、あえていきなり模擬授業から始めることを試みた。それは、英語教員の多くが、何の疑いもなく自分が生徒だったときに教えられたように自分の生徒に教えてしまう傾向があるという問題点を実感してもらうためである。また、これが様々な指導法が新たに考案されながらも、未だに多くの学校で伝統的教授法から抜け出せていない原因でもある。案の定、実際に学生たちが行った模擬授業では、最初に文法用語をふんだんに用いて教科書の新出文法項目が抽象的に説明され、次に板書された教科書本文の和訳を生徒役の学生にやらせるという内容ばかりであった。文法訳読式の授業については、短期間のうちに効率良く多くの英語表現を学習できるという点で優れているため完全には否定しないが、現在のよ

うに高校進学率がほぼ100%という状況において、すべての生徒に合った指導法ではないと私は考えている。文法や言語そのものに興味のある生徒には適した指導法であるが、そのような生徒の割合はごく少数であり、形式と意味内容のみに焦点を当てるのではなく、言語機能にも同時に着目した指導法が今後ますます求められていくと考えられる。このような状況に対応するために、最初に自分のもっている外国語教育観を自分の目で確かめ、その問題点を理解し、今後何を学ばなければいけないのか自覚できるように、指導法Ⅰの授業ではあえて模擬授業から始めるというスタイルを取ることにした。この効果があったのか、その後の模擬授業では学生の各グループが様々なアイデアを出し合い、工夫を凝らした模擬授業を行うようになっている。教育実習、そして実際に教壇に立つ際に少しでも役に立ってくれればと願っている。

一つ残念なことは、指導法Ⅰ～Ⅳのどの科目も履修者数が20～34人と比較的この種の授業にしては多く、模擬授業に時間を要するため、指導法の工夫と同程度に重要な教材作りについて学習する時間を十分確保できていない点である。この問題を解決するために、教職科目ではないが、英語英米文学科の専門科目である「教材研究・教授法」の授業で教材作りの実習を行っている。中学校・高校の授業で使用するプリントやプレゼンテーションソフトを使用した視覚教材の作成、リスニングテストなどで必要な音声編集の方法など、「教材」に特化した授業を行っている。教員を目指す学生には教職科目ではないが是非履修してもらいたいと考えている。

今後の英語教育の動向や今年度の履修者の感想を踏まえて、来年度以降の授業を充実させていきたい。

齋藤榮二(2011)『生徒の間違いを減らす英語指導法—インテイク・リーディングのすすめ』三省堂, 東京.



## 教育しないということ

文学部 神戸国際教養学科

教授 山田 勉

大学院では法学の研究ばかりしていて、教育ということは考えたこともなかった。法史学という古い時代の法を扱う学問を専攻したため、史料の眠る各地を駆け回っている間に、いつの間にか新米の教師として教壇に立ち、そんな駆け出しの授業が学生諸君の役に立ったかどうかはともかく、人に何かを教えるのは大変だということは、こちらも教室で十分に学んだ。それが今では、学生に向かうと、つい何かを教えようとしてしまう。職業病ですね、これは。

英語のよく知られたことわざに「馬を水辺に連れていくことはできても、馬に水を飲ませることはできない」という意味のものがあありますね。そこで馬が水を飲むかどうかは、彼にその気があるかどうかにかかっているということらしい。同じように、誰だって興味のないことを無理やり教え込まれたら、学ぶことそのものが嫌になってしまう。

食えることが好きで、時にすばらしい経験をすることがある。刺身でも、切り身の角が立っていて、身に適度な緊張と充実があり、食感も申し分ない。一切れの刺身にすぎないのだが、鮮度、温度、調理時間、包丁、技術、センスのすべてに、これを調理した人の意識が行き渡っていることがわかる。美味しいものを食べて幸福になりながら、こういうことのすべては、いったい教えられるものだろうか、と、ふと考える。

料理の世界にも料理学校というものがあって、現代ではたいていのことは学校で学ぶことができるようだ。ただ、伝統的な修行の世界では、学校のやり方とは違う行き方が今もあるようです。見て覚えろ、とか、型から入れ、とか、と、いう類です。祖父が能楽師だったので、家には稽古用の舞台があり、子どもころは訳もわからぬ型を言われるまま稽古していました。こういう訳のわからない人間が、そのうち「どうしてこうするのだろう」「こんな時はどうするのだろう」というような疑問をかかえるようになる。ことごとく問題発見能力などと言わなくても、それが水を飲みたくなる、学ぼうとする気持ちにつながる道を教える伝統的な方法だったわけです。

閑話休題。便利なやり方や能率的な方法、新しい考え方を教えることは、むしろ有用に違いありません。そうでありながら、大学はもっとゆったりした場所でもあったはず。教えようとするだけでなく、教えないことで気づかせようとする古い知恵に学ぶことも意味があるのでは、と考えたりしています。

## 教職をめざしての取り組み

文学部 史学科  
教授 小林 善文

中学校や高等学校での社会科関係の授業を受けて、先生の楽しく魅力的な授業によって歴史に目覚め、教壇で歴史や地理を教えたくなったと入試の面接で語る受験生が多い。歴史や地理を教えたいという夢を実現したいという希望を語って、史学科受験を保護者から認められ、入学してきた学生も少なくない。入学後、保護者との約束ということで教職課程関係の授業を履修し、その厳しさを実感している学生もいると思う。修得まで多くの条件を克服して教育実習に行ける資格を取得し、受け入れてもらえる中学校や高等学校と連絡を取り、学校訪問をして願います。その頃には、期待と不安で胸一杯となっていることだろう。

現実の教育実習では、準備に追われて夜もあまり寝られず、教壇に立てば緊張して頭の中は真っ白ということになるケースが少なくない。それでも必死に取り組んだ努力を生徒たちは認めて、惜別の色紙をプレゼントしてくれることがある。一連の体験を経て教員採用試験に臨むことになるが、限られた勉強時間で合格という目標を達成することは、困難を極める。採用試験の競争相手には、教育現場で常勤や非常勤で講師をしながら勉強を続けている既卒者が目立つ。採用者が少なく高倍率の試験が普通なので、厳しい競争とならざるを得ない。残念ながら不合格の通知を受けた結果として、他の分野への就職や進学を考える学生には、新たな世界での可能性を求めてがんばってほしいと声をかけている。しかし、あくまでも教職にこだわる学生には、講師登録をして期限付きの常勤や非常勤の講師として進む道もあり、あくまでも期限を限るという前提で、選択肢としてあげている。

教育実習のときには、担当の先生の授業を見学し、実習生同士の授業参観や放課後の部活動指導などに参加することがあるが、おおむね実習生にあてがわれた部屋で教材研究に取り組むことが多い。ところが指導に当たっている先生の日常勤務を見ていると、教材研究の時間などは皆無で、授業や会議、部活動指導、各種の校務などに忙殺されている姿を見ることになるだろう。朝の職員朝礼から夕方生徒たちを学校から帰らせるまで、業務と時間に追われ続けているのが教職員の日々である。教育現場の忙しさは先進国でもトップクラスというのが、日本の教員の実情である。

教職実践演習を担当している私は、教科指導以外の学校での教育実践を学生に経験してもらおうべく、校外学習計画、部活動指導、LHR や道徳教育といった分野の指導案を一人ひとり作成してもらい、教壇で実践してもらっている。教壇で教室にいる生徒たちを指導するのは、教員一人でおこなわなければならないからである。しかし、教育現場では教員同士のチームプレイが不可欠であることも強調している。学年団や同一教科担当者の意思疎通といった手続きは、さまざまな課題を抱える教育現場には欠かせないからである。教科指導でのカリキュラムの制約、行事や生活指導などでの学年団の意思疎通などといえ、窮屈さを感じるかもしれないが、バラバラな取り組みでは学校や学年としても教育効果を生むことができないからである。時間的制約のあるなかではあるが、担当者同士が話し合いをし、準備をしっかりとすることが、クラス、学年、学校全体のより良い特色形成につながるので、私はその重要性を強調している。こうしたさまざまな制約があるとはいえ、教壇を中心とした学校での教育指導には無限の可能性があり、工夫のしがいがある、それはひとえに教職を希望する人間の姿勢に関わっている。前向きの姿勢と知的関心を持続しようとする気持ちのある限り教育職は魅力ある仕事であるので、あくまでも教職を希望する学生にはがんばってほしいと願っている。



# ハワイ州公立チャータースクール視察報告

文学部 教育学科  
助教 谷山 優子

## 1 SEEQS 校 (the School for Examining Essential Question of Sustainability)

ハワイ州ホノルルにあるシークス中学校は、2012年に新しくできた公立チャータースクールである。生徒は120人で、6年生、7年生、8年生が縦割りの3グループに分かれて学んでいる。SEEQSとは、永続的な問いを検証する学校とでも訳せばよいのであろうか、この学校は教育の「核」を重要視する。このことを、Buffy 校長は何度も強く語った。

## 2 アメリカのチャータースクール

まずはじめに、アメリカの学校制度について少し述べておく。1980年代半ばにOECDによって展開された「学校改善に関する国際協働研究 (ISIP)」を契機に、「学校改善 (school improvement)」「学校革新 (school innovation)」「学校開発 (school development)」といった言葉が国際的に普及した。「学校改善」の定義づけは国の事情によって違い、多様で、まとめるのは困難なのであるが、ひとまず「1つまたは2つ以上の学校で、最終的には教育目標を今以上に効果的に達成することを目指して、学習条件やその他の関連する学校内の諸条件を変革することを目標とする組織的・経済的な努力」としておく。

なぜ、国際的にこのような変革が必要となったのであろうか。当時欧米諸国では人口減少、経済不況による財政力の低下や青少年の非行や低学力などが顕在化しつつあり、学校改善で対応できるのではないかと考えられたからである。少ない予算で、学校を効率的に支援し、教育効果をあげるという方策が各国で研究された。そのような背景から生まれたのがチャータースクール (以下CS) である。

CSとは、「教育委員会もしくはその他の認可を受けて教育委員会の管理から独立し、学校経営における自律性を保持すると同時に、学校責任が問われる学校」である。CSは、アメリカでは州法によって定められた公立学校で、生徒は学校選択ができる。全米42州とワシントン特別区においてCS法が制定されており、初等中等教育に在籍する児童生徒の5.9パーセントにあたる290万人 (2015年3月現在) が在籍している。1992年にミネソタ州でCSが開校して以来、公立学校をドロップアウトした児童生徒にセカンド・チャンス・プログラムを提供するCSや保護者との強い連携を目指すCS、学力向上を重視するCSなど、それぞれ多様な目標を掲げた学校が多く存在する。また、CSは、公立学校より教育予算を低く抑えることができる。米国の平均的な公立学校の児童生徒にかかる年間経費の64パーセントですむ。教育予算がかからないので、主な改革としてSC化が推進されている。

しかし、CSは学校選択という形態をもつので、児童生徒が集まらなければ閉校になる。そのために、CSは、自校の教育の特色と教育効果について、常に検証し改善し続け、成果を発信していく努力が不可欠となる。

### 3 ハワイ州の特徴

アメリカは、日本と違って、人種や民族が多様な国家である。ハワイ州も、先住ハワイ人とポリネシア系が約6%、日本からの移民である日系人、中国系といったアジア系が約40%、黒人約2%、白人約25%、これらの混血約25%となっている。英語を話さない先住民や移民の子どもたちも多く、子ども同士言語や文化の違いも多様であるし、アメリカ本土の子どもたちとも異なる。「落ちこぼれ防止(NCLB)法」の下で実施されている公立の小中学校および高校の州統一テスト(PSSA)の成績は全国平均より低い。

### 4 SEEQS の教育

今回視察したシークス中学校の学校経営は、「組織的構造(structure)」「人材(people)」「カリキュラム(Curriculum)」「授業(system)」が互いに連動しあうことを重視する。これがまず、学校のコア(核)となる。そして、周囲にはこれらを取り巻く「環境・文化(culture)」がある。すべてにおいてもっとも重要なのは「人間性(humanness)」なのです、と校長は強調した。この学校経営は、ドイツのヘルベルト・ブッヘン(Buchen2006)らが唱えた「学校開発(Schulentwicklung)」の概念をモデルに考えられているのではないだろうか。学校開発論とは、組織開発論を用いて学校の構成員自身で学校教育を改善・変革するための方法論であるが、最近では日本の学校改善の中にもこのようなモデルが見られる。

シークス中学校では、これらの教員やスタッフ、保護者、生徒全員が守らなければならないルールとして「safe(安全な)」「kind(親切な)」「respectful(礼儀正しい)」「responsible(責任がある)」の4つの約束がある。これも、この学校の教育のコア(核)である。

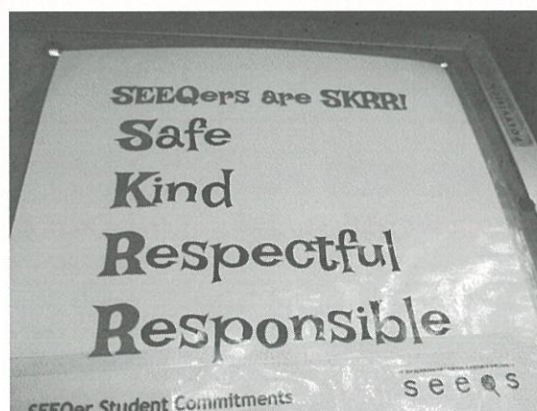


写真1 「シークス中学校の約束」(筆者撮影)

来客の受付に大きく掲げられている。来客も、この学校に一步足を踏み入れたら、このルールを遵守せねばならない気分になる。

### 5 特色に満ちたカリキュラム

生徒は、午前8時前から保護者の運転する車で学校にやってくる。8時45分からの始業まで、好きなことをして過ごす。宿題(home work)をする子、友達とおしゃべりする子、訪問者の私のところにやってきて自己紹介する子。そのほか、数人でラグビーをして遊んでいる子どもたちの様子は、登校してすぐドッジボールをする日本の子どもたちと全く同じである。ハワイに点在する巨大なモンキーポッド(ネ



ムノキ科)の樹の下は、心地よく、誰もが憩える安らぎの場でもある。

視察した時期の1日の流れは、月曜日から金曜日まで1限目8:45～9:30、2限目9:40～11:55、ランチタイム11:55～12:35、3限目12:35～13:35、4限目13:40～15:30、15:30から10分間ほど掃除当番が掃除をし、時間が来たら120人全員で終わりの会(日直2人が挨拶をする)をして解散するというものである。ただ、水曜日の始業時間は9:45である。これは、朝に教師やスタッフがミーティングをするから、ということであった。朝に1時間の職員会議をするのかとびっくりしたが、理由は簡単で、「その方が、頭がすっきりしてるから」とのことであった。午前中は、75分の授業であるが、これは「ディスカッションをするにはこれくらい必要よ」とのことであった。教科も数学や英語といった学力をつける授業が入っている。





THE SCHOOL FOR EXAMINING ESSENTIAL QUESTIONS OF SUSTAINABILITY (SEEQS) (sample) Student Schedule						
	Monday	Tuesday	Wednesday		Thursday	Friday
8:30-9:15 [45 min]	Physical Activity/Club (middle school w/ Advisory)	Physical Activity/Club	[delayed start for students] Teacher Professional Development		Physical Activity/Club	Physical Activity/Club (middle school w/ Advisory)
9:20-10:35 [75 min]	Mathematical Applications	Science Explorations	Historical Perspective	9:45-10:40 (55 min)	Mathematical Applications	Science Explorations
10:45-12:00 [75 min]	Historical Perspective	English Language Arts	Mathematical Applications	10:45-11:40 (55 min)	Historical Perspective	English Language Arts
12:00-12:30 [30 min]	lunch	lunch	lunch	11:45-12:15 (30 min)	lunch	lunch
12:35-1:35 [60 min]	Artistic Expression	Artistic Expression	Assembly/ Town Hall/ Advisory	12:20-1:30 (70 min)	Artistic Expression	Artistic Expression
1:40-3:30 [110 min]	Essential Question of Sustainability (EQS) 	Essential Question of Sustainability (EQS) 	English Language Arts	1:35-2:30 (55 min)	Essential Question of Sustainability (EQS) 	Essential Question of Sustainability (EQS) 
			Science Explorations	2:35-3:30 (55 min)		

写真2 「シークス校の時間割の一例」(ホームページより)

時間割は生徒の心身の状態を鑑みながら非常に工夫され合理的に組まれている。この学校の特色が最も現れているのはこの時間割でみると5限目の「EQS」の時間で、自分が探究したい課題別に分かれて、能動的に学ぶ。課題は、これからの21世紀の社会で生きていくための持続的な問いの答えを探究するもので、子どもたちはパソコンや本で調べたり、体験したり、ディスカッションしたりしながら、学んだことを個人のポートフォリオファイルに綴じていく。例えば、「自然環境を守る」というテーマで「水」について探究するチームは、雨水をタンクに貯め、水やりに用いる。そのタンクの中には、魚がいて、ボウフラを食べるから蚊が湧いてこない。このような体験も生活に織り込みながら学習するということ、タンクをみせてもらい説明を受けた。

授業は、6・7・8年生の縦割りで3つのグループに分けられている。インクルーシブ教育なので、例えば、みんなといっしょの授業の場にいるが、個別の課題を教師とマンツーマンで行っている子どももいた。この子どもは、授業以外は保護者が手助けをしている。教員は授業だけ行う。重度の知的障害や肢体不自由のある子どもはいなかったが、発達障害のある子どももいない子どもも安心して学べ、認められ、自分のよさを発揮できる雰囲気になっていた。

ランチタイムは、モンキーポッドの木陰で全員で集まって食べる。どこに誰と座るのかは自由である。

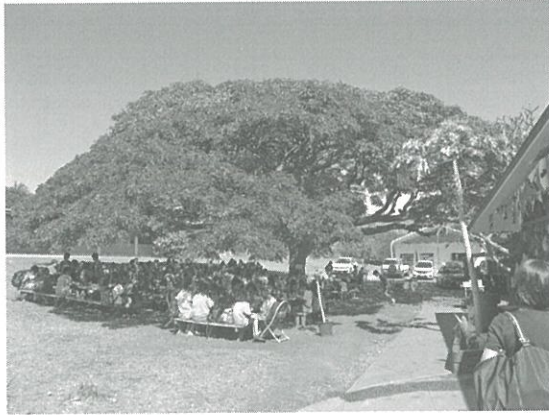


写真3 「ランチタイム」(筆者撮影)

モンキーポッドの樹の下は、心地よい風が吹いている。教職員には、バイキング形式のランチが提供される。各自好きなだけ皿に取り、同僚と喋りながら食べる。生徒に食事の指導をしたり、一緒に食べたりする必要はない。

午後からの授業は、「眠くなるから」ということで、「Artistic Expression (アート表現)」の授業になっている。参観した授業は、適当に選んだ本の中の1文を読んで思い浮かんだことをパソコンで検索し、そこから得たイメージを黒い絵の具で白い紙に描くという課題であった。子どもたちは、1つのテーブルに4～5人で座って作業をしているが、自由に立ち歩いて好きな場所で作業をしてかまわない。水筒のお茶を飲んだり、部屋を出て行き、また戻ってくる子どももいる。25人の生徒に対して、全体指導をしながら個々の生徒の指導にまわる教員が1人と、各テーブルに1人のスタッフ(教員か支援員)がいて、生徒はいつでもヘルプを出せる。気持ちが不安定になり教室を出て行った生徒と1人のスタッフが校舎脇の大きな樹の木陰に置いてあるテーブルで話をしていた。こういう「リソースルーム」があると理想的だと感心した。ハワイの学校ならではの風景であった。

## 6 どう学ぶか

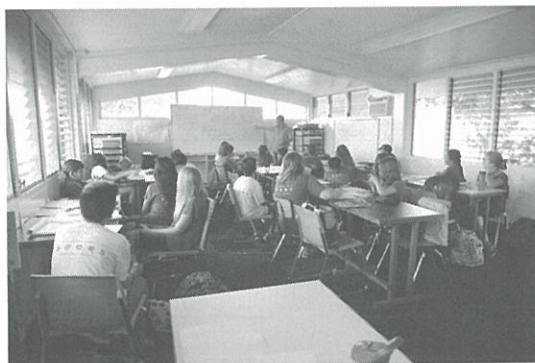


写真4 「1限の教科の授業風景」(ホームページより)

はじめに教師が、今日何を学ぶのかを説明する。また、この時間の流れの見通しを板書する。子どもたちは個々に考えたり、グループで話し合ったり、ノートパソコンで検索したりして課題に取り組む。その後、自分の考えをみんなにわかりやすく発表するのであるが、聞く態度はとてもよい。聞いていないと質問ができないからだ。質問をした子どもが詰まると、ほかの子どもが手助けをする。このような積み重ねで、討論する力を培っていくのだろう。「Relationship (関係)」ということを校長は強調していた。子どもが話をし、「ありがとう」と教師が言って終わるのではなく、子どもと教師が話をつなぎながら進めていく関係性を意識して取り組んでいるということであった。





写真5 「4限のEQSの授業」(ホームページより)

EQSとはEssential Question of Sustainabilityの略で、訳すとすれば「持続可能な本質的な問い」ということになるだろうか。批判的思考をつけたり、問題解決学習を行う授業である。日本の「総合的な学習の時間」のようなものだろうが、課題設定と生徒につける力が明確になるような命名である。これを学校の核としているところも、この学校の特色である。ホームページにもフェイスブックにも取り組みと子どもの成長が次々と紹介されている。子どもたちは、自分の考えを持ち、隣の子ともシェアしあう。その際、「Simphathy (気のあう)」「Empathy (共感)」「Acceptance (受容)」という言葉が、教室の壁に掲示されていた。

## 7 シークス中学校を訪問して

今回の訪問は、アメリカの特別支援教育について実際に見て考えを深めたいとの思いでシークス中学校のバツフィ先生にメールをし、快く受け入れていただき実現した。CSということで、見学の受け入れ体制も充実していてスムーズにことが運んだ。ホームページを読めば、学校の理念や校長の思いが強く伝わってくる。これだけの説明責任と生徒の目に見える成長が、学校の存続に不可欠ということもあるだろう。子どもたちは一人ひとりが自分の居場所や役割をもち、生き生きしている。外国人の訪問者にもものおじしない。自分から話しかけてくれるし、日本語で声をかけてくれたりもする。日本からこの学校に入って学んでいる子もいる。この子はもう英語のほうが流暢なくらいで、感心した。のびのびと自分の長所を伸ばしている様子にうれしくなった。ハワイの人種・民族の多様性は、本土アメリカ以上で、学校の教育課程の制定は苦難の連続であろう。しかし、互いの違いを認め合うことは障害のある子もない子もともに学ぶインクルーシブ教育の原点とも言える。

午後3:40に子どもたちが解散した後、すぐに教員やスタッフが集まり、円になってミーティングが始まった。30分ほど、活発にフィードバック(ふりかえり)を行った後、訪問者の感想を聞きながらのミーティングに移った。会議は、時間厳守で終わる。学校に残って遊んでいる子どもは教員の管轄外である。部活動を見てやる必要ももちろんない。うらやましいような働き方である。日本とどこが違うのだろう。日本では、生徒と一緒に過ごす時間が長いほど信頼関係が築けると考える。しかし、ここではそういった考えはなさそうである。子どもが「先生〜っ」といって好きな先生に抱きつくこともない。教員は学校のスタッフであって、どのスタッフに声をかけても、適切なヘルプが得られると子どもは考えているようだ。合理的であるが、少しさびしい。

日本の今後の社会の変容を考えても、学校改善は必要だ。先をいくアメリカの教育に学ぶべきこともたくさんあるが、そもそもアメリカのように人種・民族が多様で言語や文化、風習の違う子どもたちを相手に授業をする必要がなかった日本には、それはそれで大切にしないといけないことがある。寺子屋

や藩校で教育を行ってきた日本の教育の不易流行がある。アメリカは「自由」が最優先で尊重される。日本は「自由」は第一ではない。ここをわきまえて、アメリカの研究成果を分析し、日本の学校教育のあり方を模索していく必要がある。

最後に、シークス校訪問にあたり、たくさんの手助けをいただき、お心遣いをいただいた。お世話になった皆様に心からお礼を申し上げる。(2016年1月)



写真6 「笑顔いっぱい」(ホームページ表紙より)

#### 参考文献

- ・南部初世ほか「学校改善の支援に関する国際比較研究」日本教育経営学会国際交流委員会、2015年
- ・SEEQS ホームページ <http://www.seeqs.org/> (2016- 1-28 確認)
- ・日本教育経営学会・学校改善研究委員会編「学校改善に関する理論的・実証的研究」ぎょうせい、1990年
- ・浜田博文「アメリカにおける学校認証評価の現代的展開」東信堂、2014年
- ・篠原清昭ほか「学校改善マネジメントー課題解決への実践的アプローチ」ミネルヴァ書房、2012年
- ・遠藤孝夫「ハンス＝ギュンター・ロルフの学校開発理論に関する研究-学校マネジメントの理論的深化のために-」岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第14号、2015年
- ・Eckstein, M.A. United States : The Encyclopedia of comparison education and national system of education.
- ・Berry, B. 2011 Teaching2030 Teachers College Press.



## 教師になりたい自分に向き合って

家政学部 家政学科  
教授 田 中 陽 子

なぜ教師になりたいのか、どんな教師になりたいのか、どんな教師になれるのか。そして、本当になりたいのか。教師を目指す過程でさまざまな問いに直面すると思います。教師になりたい気持ちは山々でも、教師になりたい自分を深く掘り下げることには抵抗を感じる人は少なくないと思われます。なるべく曖昧にせずに、問いにはきちんと向き合ってもらいたいものです。いずれ採用試験の時期になると、それを言葉にして人に伝えることが必要になります。人に伝える機会がなくても、自分を認識するためにも必要な作業です。

問題なのは向き合い方、言うなれば問いに対する答えをどう導き出すかです。教師を目指す人が共通に抱える問いだとも言えるので、自分のことはさておき、ついつい他人のことが気になります。知らないうちにどこかで聞いたことのあるような言葉や、誰かがすでに使ったことのあるような言葉で手っ取り早くまとめてしまう人がいます。それは自分の心底から湧いて出た言葉ではないので、その時はごまかしでうまいことを言っているようでも、突っ込まれるとそれ以上の言葉が続かなくなり、相手を落胆させることもあり得ます。所詮、急ごしらえの言葉に真実は宿るはずもなく、かたちばかりの底の浅い教師像しか描けないことになります。

先に挙げたような問いに、いざ向き合ってみると、何も考えていなかった自分にあわてることもあるでしょう。教師という目標が視線の先にくっきりと見えている人でも、「教師のことはよくわからない」「果たして自分に教師が務まるのか」と不安に思っている人も少なくないはず。しかし、わからないというのも自分と教師との距離が確認できたことであり、まずは目標に向き合って、自分の位置やこれからの在り方を確認してください。教師という、まだ自分にとっては曖昧な対象に問いを通して向き合うことは、ものの考え方を整え、感じ方を鍛えていく機会となります。そのことはやがて教師としての自分なりの基本や秩序になっていくものと考えます。

ときに教師に対する憧れが強すぎて、それが畏れとなり、自分にストップをかけてしまう人がいます。認識を深めず安易に開き直って突っ走るのも考えものですが、真面目に向き合うほどに教師を偶像化し自信をなくしてあきらめてしまうのは惜しい。教師という職業は同じ生徒との関係を毎日積み重ねていく地味で根気のいる仕事です。言い換えれば、深める営みが日課となります。それだけに自分の無力や限界を絶えず突きつけられながら、子どもとの緊張関係を強いられる厳しい側面をもちます。教育実習で体験する楽しい経験とは異なる世界です。畏れを感じるというのはそれなりの向き合い方をした結果であって、いいかげんなどころにとどまっていなかった証しです。ある意味大事なことでしょう。というのも、自分の内面に向かって降りていく深さは外に向かって飛翔する力と分かちがたく結びついているからです。それは、ひとつのことを深く掘り下げて得た知見がものごとを客観視できる、普遍化できる知見につながるのに通じます。家庭科教員になりたいという願望を成し遂げる鍵の1つは、教師になりたい自分に真摯に向き合う作業にあると考えます。